

書評

和泉 徹 総監修 石川三衛, 河原克雅, 南学正臣, 福井 博 編

浮腫～塩・水過剰, 新たな展開とは?～

自治医科大学

永井良三

西欧医学は古代ギリシャに始まる。当時、病因論には二説あった。ひとつは古代インドから伝えられた四大説である。これは仏教医学でも同様である。万物は地、水、火、風から構成され、生体におけるこれらのバランスの異常が病気を起こすとする考えである。例えば、水腫病は水の異常、炎症は火の異常による。これに異を唱えたのがヒポクラテス学派だった。彼らは、病気の原因は体液の混和の異常であると考えた(体液病理学)。体液病理学は長く医学の基本だった。しかし約150年前、ドイツのウィルヒョウの細胞病理学によって否定された。しかし抗血清療法の開発やホルモンの発見により復活する。現在の病因論は、四大、体液病理学、細胞病理学のすべてを基盤としていると

いっても過言ではない。

本書は、浮腫の生理学、病態、臨床を取り上げ、体液病理学と細胞病理学、そしてアートとしての臨床医学をカバーした好書である。とくに医学の歴史を考えると、こうした複数の視点から浮腫を論ずることの重要性を再認識させられる。近年の医学研究は、ややもすると分子レベルの分析に偏向しがちである。分子は生体の構成要素であり、これは「四大」の今日理解であるが、そのみで生体恒常性を語ることはできない。したがって浮腫についても、分子生物学だけでなく、器官や個体の機能と制御機構の全体像を理解し、臨床実践までを語らなければならない。

本書は4章で構成されている。それぞれ細胞外液・体液の生理

学、浮腫の病態生理学、治療学、診断学に対応する。各章はさらに10, 14, 7, 3項目から構成され、全体は309ページである。とりあげられている浮腫に関わる疾患は、心不全、ネフローゼ、腎不全、肝不全などの全身性の浮腫をきたす疾患から、リンパ節廓清後の浮腫や脳浮腫、メニエール病などの限局性の浮腫まで極めて多様である。

医学が専門分化するなかで、横断的な医学書は、臨床医だけでなく研究者にとっても貴重である。浮腫という一つの症候を、かくも多角的に分析し、すぐれた教材に仕上げたのは、監修者と編者の優れた企画力によるものである。本書はさらにどこからでも読むことができ、いずれの項目も簡潔明瞭、論理的に記載されているため読みやすい。医学生だけでなく、あらゆる年代の医学者と臨床医に本書をお薦めする。

[B5 頁 320 2014 年 定価
(本体 5,600 円+税) 医薬ジャーナル社刊]